

厚岸湖畔の植生調査及び厚岸町の現存植生について

滝田 謙讓

I、はじめに

日本における干潟は沿岸の護岸や開発により非常に減少し問題になっている。

北海道における塩沼湿地は太平洋側やオホーツク海側に散在し、主なものとして厚岸湖・春国岱・野付半島湿原・能取湖・サロマ湖が上げられる。それ等の塩沼湿地も護岸・昆布干し場などの開発や、自然の地盤沈下や隆起によって最近は減少している。

厚岸湖については、辻井(1996)によると、湾内には塩生植物で有名な国の天然記念物「厚岸湖牡蠣島植物群落」(1921年指定)があった。

しかし、1952年には館脇・山中により牡蠣島を含めて海岸域の植生が縮小していることが指摘され、その後辻井(1956年)の調査で牡蠣島の沈下により生育地の消滅・減少が著しいことが分かった。

また、1954年には牡蠣島は干潮時にも水面上に現れなくなったために、この島の塩生植物は消滅し、1994年に国の天然記念物の指定が解除されている。

今後厚岸湖の塩性植物群落がどのように遷移してゆくのか、予想し検証していくために湖畔の現存植生を調査しておく必要がある。

厚岸湖畔は周囲は約20kmある。全周囲を一度に調査することは難しいので今回は、厚岸湖畔の南側から調査することにする。

II、厚岸湖・厚岸湾の地形

厚岸湖・厚岸湾は北海道東部太平洋海岸に位置し、陸地に深く入り込んでいる。その地形を大別すると、南側は厚岸半島、西側は尾幌丘陵、北側は釧根丘陵になっている。

厚岸湾は厚岸半島から西の尻羽岬まで、湾口が広く開き、周囲は海拔100~200mの低い丘陵地で沿岸に平地はほとんど無く、湾の北東部は幅600mの狭い水路で厚岸湖に連なっている。厚岸湖湖畔には南側にイクラウシ川・東海川が流入し、東側にトキタイ川が流入している。また、北側には厚岸町を西東に流れる尾幌川と大別川を合流する厚岸町最大の別寒辺牛川が北から南に流入している。

厚岸湖にはイクラウシ川河口・東梅川河口・トキタイ川河口及び別寒辺牛川河口の広い潮間帯があり塩沼湿地を形成している。

III、厚岸湖の植生

厚岸湖周辺は流入する川に沿って低層湿原が発達し、湖岸の塩沼湿地に続いている。低層湿原の周辺の山地はサワシバ・ミズナラ群集になるが、境界にはハンノキの群落が帯状にある。山地は二次林で原始林はないが、厚岸半島部にトドマツの老木が散在しているし、所々にカラマツ・トドマツの植林が見られ、厚岸町の中で最も自然度がの高く、広い森林に地域になっている。

今回の調査では、厚岸湖南側の湖岸の調査を主に行ったので、その概要を報告する。